
IS 一日本帝國軍ノ男一

高月 遠夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS ―日本帝國軍ノ男―

【Nコード】

N1868X

【作者名】

高月 遠夢

【あらすじ】

大日本帝國軍特殊部隊隊長の月足 茂は硫黄島にて隊員立ちを本土に全員帰し一人残り戦死した：そんな彼がISの世界に：

※この小説は作者がノリと勢いで無計画に書き始めたものです
最悪更新が止まることもありえます

其ノ巻（前書き）

えーと何から謝りましょうか…

まず、無計画にやっちゃってしまつてすいません

次に、今書いている小説が書き終わってもないのに
新たな小説を書き始めてしまいすいません

其ノ巻

1945年3月8日 硫黄島

――第四九四特殊部隊磊落隊――

「我が隊員達に次ぐ、君たちはこれからどんなことをしてでも生き残ってもらう

例え、アメリカ軍の捕虜になろうともだ。」

硫黄島はもうすぐアメリカ軍の総攻撃に合うだろう：

「君たちには、家族がいる。今君たちにできることはアメリカ兵を一人でも多く殺すことではない。未来

に子孫を残すことだ。もはや日本にはアメリカに対抗するだけに戦力はない」

神風特攻部隊、回天、桜花等全て兵たちの命を散らす作戦ばかり：

「そしてこれが私の、隊長としての最後の命令だ。『誰一人、死ぬことなく家族の下へ帰るのだ』：そして、

現時刻、一〇二五をもって第四九四特殊部隊磊落隊は解散だ：皆今までよく頑張ってくれた。」

「隊長、納得がいきません。私たちはまだ戦えます。」

まだ、戦える：か

「…君たちはもう民間人だ、軍人ではない。戦うのは軍人だけで良

いのだ。

さあ、全員ボートに乗り、早く乗らないと死ぬぞ。」

「で、では隊長は…どうするんですか？」

「安心しろ、私はまだ軍人だ君たち民間人を守る義務がある。…さあ行った行った、アメリカ兵がここにくるのも時間の問題だぞ」

そう言って私は全員がボートに乗り硫黄島から離れていくのを見届けた

「（全員行ったか…これで、良かったのだよな…）」

さあ、我が最後の戦場だ…」

第日本帝國軍第四九四特殊部隊磊落隊隊長 月足 茂

磊落隊全隊員を無断撤退させた後

硫黄島元山周辺の戦いにて戦死

「…ここは？私は硫黄島で死んだはず…死後の世界か？」

「惜しいわね、ここはあの世とこの世の狭間よ」

あの世とこの世の狭間…

「三途の川？」

「まあ、そんなところね…にしても全く驚かないなんて…あなた、熱烈な仏教徒だったりする？」

「ああ、熱烈かどうかはわからないが仏教徒だが…私は地獄に行くのか？神の子であられる天皇陛下逆らってしまったからですか？」

「いやいや、私子供作ってないし、まず子供とかいない…いや作ろうと思えばいつでもつくれるのかなあ……ねえ？私と子作りし・ない・？」

「…こいつは馬鹿か？あって間もない私と子作りなど…痴女か？痴女なのか？」

「痴女って…さすがの天照さんも起こったぞー」

…心の仲が読めるのか…ん？その前に天照とか言ってなかったか？

「あの、あなたは一体誰なのでしょうか？」

「私は、みんなから天照大神と呼ばれるより、気軽にアマテラス

ちゃんって呼んでね♪」

「…神様？…あなたが髪だというのならなぜ私の前に現れたのですか？」

「ぶく、疑ってる」

疑ってるって…まず自分が神様という人は頭がおかしいとしか思えないのは当たり前だと思うのだが…

「まあいいや…それよりさあ、あなた、転生に興味ない??？」

「転生する時代はあなたの生きてた時代から…60年ちょっとたったぐらいかな？」

あ、もちろんチートも付けてあげるよお」

60年あとの時代？2000年ぐらいか…その前にちーとはいいたい？

「ふくん、チートが分からないか…じゃあ私が勝手に決めとくねえ…えーとあれ？オリハルコンってここに置いてなかったけ？まあ緋色金があったからこれでいいや…あとは…あ！舞空術っておもしろそ…うくんあという物っていったら…体術と剣術ぐらいかなあ、でも剣術はもうかなりすごいし体術を少し上げるだけでいいか」

…何だ…非緋色金とか舞空術とかが聞こえた気がするんだが…

「転成するタイミングは、…適当でいいや」

タイミング？って、適当！？

そこで私の意識は失った…

其ノ壺（後書き）

ちなみに磊落はらいらくと読めます

そして私の小説を全て見てくれていた人には月足の名前に何か思い
当たるかも？

設定（前書き）

…設定ってどう書くのだけ…

設定

月足 茂

元大日本帝國四九四特殊部隊磊落隊隊長

身長…176cm(26歳時)

体重…64kg(26歳時)

黒髪黒目の今は珍しい純粋な日本人

白騎士事件の手前にISの世界に(その時は16歳)

硫黄島での最後の命令により軍歴を剥奪されたが、
その後隊員たちのおかげで軍歴がもとに戻り名誉の戦死となった

能力・武器説明

神刀・空桜

非緋色金により作られた刀

刃こぼれしない・折れない・錆びない

をコンプセントに作ったらしいが本人は信じておらず、手入れを毎日欠かさずやっている

舞空術

…これがないと生身でISと戦えないからです
え? いや、主人公にISを持たせるなんてそれに男ですよ?

体術・剣術

元々特殊部隊だったので柔術、空手、銃剣道に精通しており、

ある流派で剣術を習っていたことからほぼ能力値に補正はいらなかった：対人戦なら
が、相手がI Sということで神様補正を受けることとなった

其ノ式(前書き)

ッハ!! 根むむすぎて適当に書いた気が…
1000字も超えてないとは…
だめだ、眠すぎる

其ノ式

「なるほど…転生と言っても赤子からやり直すわけではないのか…だが、若返ってはいるな。年齢は…15〜17当たりか。服装は、少し違うが憲兵か？」

そして、周りの建物を見てここが、少なくとも1940年代の日本ではないことが分かった

「にしても、転生か…あの言い草だと私だけが転生したような気がするが…いや、記憶をもって転生したのが私だけなのか」

しばらくすると空から紙が落ちてきた

「…ISが……女尊男卑で……原作？の少し前……」

ISか…それがあれば日本帝国…いや、やめよう。あの状況であれば例えどのような兵器であろうとも、負けるしかなかった筈だ…」

にしてもISか…宇宙での活動を目的として開発されたが人間には兵器にしか見えなかったか…しかし、原作？の10年前ということ…これは未来の知識なのか？

「まあ、何にせよ今どこにいるのかを確認しないとな…」

私は周りが見渡しても誰もいない、いや、いるにいが隠れているか…刀を持ってこんな格好をしていたら誰も近づいてはこないか…

その後私は海にいき、港を探し、少し歩くと港が見つかった

「すまないが、ここは何処だ？」

私が近くにいた漁師に問いかけると

「お前さん、馬鹿かい？ここは東京だぞ？田舎者でもそれぐらいは分かるだろう」

思いつき馬鹿にされた：たしかに私も場所がどこだかもわからない大人を見たら馬鹿にするだろうな

「ああ、そうでしたね。ちょっとド忘れしたみたいで：あの、もしこれから海に出るのだったら硫黄島に連れていってもらえませんか？」

「いいけどよお、あそこは軍関係者以外は立ち入り禁止だったはずだぞ」

立ち入り禁止か：遺族とでも言えば入れるか？

「いえ、大丈夫です。送ってください」

「お、おう、送るだけ贈るが途中からは泳ぐなりなんなりして行ってくれよ」

泳ぐか：そーいや私って空を飛べるんだったな。あれ？じゃあ船乗らなくても：ま、いいだろう

其ノ式（後書き）

おやすみなさい…

其の参

「そろそろ、泳いで行ってくれ。

ここから先は軍が立ち入りを制限している。まあ、今からでも戻りたいってのなら

送っていくが、どうするよ?」

心優しい漁師だった。口が裂けても勝手に船の中にあつた魚を食っていたとは言えないが…

「いや、ここまで乗せてくれてありがとう。
ここからは走っていくでしょう」

最も海面より少し浮いて行くから足は動かさなくとも大丈夫なのだが案の定漁師は声を上げて笑っていた。

「海を走る、か面白いこと言うな。
あれか? 右足が沈むより早く左足を出してその左足が沈むよりも早く右足を出す、の繰り返しをしていくのか?」

さすがにそんなことが出来るのは私よりもっと修行を積んだ人（と呼べるかはわからないが）にしか出来ないものだろう。

「ああ、そのようにできなければ泳いで行くまでだ」

そして茂は勢い良く海に飛び込んだ…が洶洶とした音は出なかった。恐る恐る茂がした覗くと海の上に立っていた。

「こいつは、たまげた。海の上を走るのならまだしも、海の上に立

「つちまうとはな」

「ああ、俺も驚いてるよ。何せ貰い物の力だからな。本当に出来るかどうか分からなかったんだが…これを見る限りそいつも信用しなくてはならないと思っている」

「貰い物？まあ、いいか。

凄いいもん見せてくれたお礼だ。いいことを教えてやんよ。今硫黄島に行っても軍人はほとんど居ないと思うぜ。

ついさっき日本に向けて2000発ものミサイルが発射されたらしいからな。」

ミサイル？…2000発も？今は戦争中なのか？

「だが、そのミサイルを全て叩き切った奴がいるらしいんだとさ。しかもその機械とパイロットを捕獲するためにほぼ全世界の部隊が動員されたらしいが、

それもほとんど壊されて行ってるからな。

そしてその部隊の中には自衛隊も入ってるわけだ」

日本を助けたのに日本の軍隊も攻撃する…か。何がしたいのだ？

「わかった、何から何まですまんな。」

そして船は漁港へと戻っていった。

何でもここから数10km離れたところでその機械が世界と戦っているから兵器の破片などが落ちてくるのが怖いそうだ。

にしても機械…か、是非とも戦いたいものだ…

其の参（後書き）

主人公のことですが

憲兵番長の服装と違ってください

…決して、憲兵番長のような顔ではない、という脳内設定は私の中にあります

其の肆

硫黄島にて――

戦場だった頃よりかは自然が戻り、港と飛行場が建設されていた。そして慰霊碑を見つけてしまった。

月足茂曹長

部下想いの優しき軍人

此処に眠る

墓地の前にはまだ新しいと思われる菊の花が一輪置かれていた。

「一応、まだ生きてはいるんだがなあ……」

自分の墓地を見る羽目になるとはな……きっと古代エジプトの王達もこんな気持ちだったのだろうか。

「憲兵？ いや、でも白いし……それに昔のやつだよな？ もしかして……コスプレか？」

人がいないと言っても少しは残っているのかそれとも一〇二等兵なのか。

「まあいいや。おい、お前ここは民間人は立入禁止だぞ。どうやって入ってきた？」

空を飛んできた…とは言えんよな。

船でできたと言ってもあの優しき漁師に迷惑がかかるだろうな

「墓参りに…」

「墓参りが出来るのはお盆の時だけだと決まっている。

それにここにこれるのは硫黄島協会からの飛行機のみだ」

手詰まりかもしれないな…

部下の名前でも使って回避するか

「ある人に頼みここまで送ってもらった。唯それだけだ」

「ある人とは誰だ？」

「貴様に言っても、分からん様な人だ」

「もういい、おまえ動くなよ、絶対に動くなよ!!」

そんなことを言われて動かない奴がいると思っているのだろうか？

茂は刀を抜刀しそのまま振り切る——と、死んでしまうので峰で腹を打った。

「まあ、なんだ。悪く思わないでくれよ？それにいい経験にもなっただろう？」

此奴よりも、厄介な奴が来たら面倒か…

そういえば世界中の軍隊が集まって一つの機械を奪おうとしているんだっただな…

其の肆（後書き）

感想待ってます

掛け持ちしているアリアの方はどうしたって？

2巻を友達に貸してもらったので

今どういうふうに書いていこうか悩んでいます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1868x/>

IS 一日本帝國軍ノ男一

2012年1月12日15時45分発行